

# J.S.S.W NEWS

No.132

Contents

## 日本ソーシャルワーク学会通信

2022年3月10日

【発行責任者】 小山 隆

【編集責任者】 荒井 浩道

I. 巻頭言「『構造を変革する』ための『大きな行動 Action』 『小さな行動 action』」	横山 登志子… 1
II. 「第39回大会」開催案内	2
III. 「ソーシャルワーク・コラボセミナー」開催案内	3
IV. 「国際研究セミナー」報告	5
V. 役員選挙結果	7
VI. 2021年度第3回理事会議事録	8
VII. 2021年度第4回理事会議事録	11
VIII. 会員の声（2021年度新入会員）	14
IX. 自著紹介	17
編集後記	荒井 浩道…20

## I. 巻頭言

### 「構造を変革する」ための「大きな行動 Action」「小さな行動 action」

札幌学院大学 横山 登志子

(学会理事／研究推進第2委員会、総務委員会)

社会福祉士および精神保健福祉士の新カリキュラムが2021年度入学生より適用され、次年度には2年生で新カリキュラムのソーシャルワーク実習が実施される場所もある。養成校も現場も、とまどいながら新カリキュラムにおける240時間の実習・実習指導・演習の準備を進めている状況である。その新カリキュラムで特に重視されているのが、「地域共生社会」の実現に向けた、地域における包括的支援体制構築などマクロ実践の強化や、実践能力を有する人材養成である。

マクロ実践とは、日本社会福祉士会の『マクロソーシャルワークの理論と実践 あたらしい一歩を踏み出すために』（中央法規、2021）によると、「不特定多数の人々への影響を想定し、社会・経済状況、法律・制度、意識・価値観、偏見・差別等の社会不正義、慣習等の変革を目指して展開する意図的なコミュニティ実践（組織化、計画化、資源・能力開発、アドボカシー）、組織運営管理、政策実践である」とされており、ポイントは「不特定多数の人々への影響を想定するか」ということと「社会変革を目指した意図的な実践か」の2点にあるとされている。ミクロから派生した比較的小さなメゾ実践を越えて、地域の不特定多数にむけた、社会変革的な意図的な実践がそのねらいである。

ひるがえって、そのようなマクロ実践あるいはマクロソーシャルワークにどうコミットメントしているか？を考えてみたとき、いくつかの階層があることに気づく。職能団体や所属学会の単位でどのような活動があり自分はどのように参画しているだろうか、所属組織としてどのような活動があり、自分はどのように参画しているだろうか、それ以外の個人や集団をベースとしてどのような活動に取り組んでいるだろうか。あるいは、日々のミクロ系実践のなかで、どのような制度上、仕組み上、社会規範上の「もやもや」をそのままにせずとりあえず言葉にして誰かと共有し、次の思考や行動につなげているだろうか。

「構造を変革する」ための行動には、このように大きな単位で制度的・組織的な行動をとっていく「大きな行動 Action」と、個人や集団単位での日常的な「小さな行動 action」があると考えられる。その意味でいうと、すべてのソーシャルワーカーはマクロ実践と地続きの実践を必ず行っているはずである。それをぜひ意

識化しよう。そして可視化して、つながりのなかで行動（Action/action）しよう。

このことを考えるとき、いつも2020年6月に逝去なさった関西学院大学の石川久展先生を思い出す。先生が病身をおして本学会の研究セミナー（2020年1月26日）でご講演くださったときのメッセージもメゾ・マクロ実践の意識化とそのための理論的ツールであった。このメッセージを受けとめながら、コロナ禍であらわになったさまざまな問題や課題に向き合っていきたい。

## Ⅱ. 「第39回大会」開催案内

テーマ：人口減少地域におけるソーシャルワークの創造性

青森県立保健大学 工藤 英明

（第39回大会実行委員会事務局長）

わが国では、2008年をピークに総人口が減少に転じ、地方から都市部への人口流出も継続している。人口減少は、地域での生活継続の困難性やインフラとしての福祉サービス提供機関、ソーシャルワーカーをはじめとする専門職の担い手不足も生じさせる。そのため、既存の制度があり、ソーシャルワークを必要とする人がいるにもかかわらず、サービスや専門の人材配置が少なく、福祉課題に十分対処できない地域も少なくない。

人口減少地域でのソーシャルワーク実践では、地域住民の協力体制の構築をはじめ、限られた人材や社会資源のなかで、専門的サービスの提供体制も検討しなければならない。よって、本大会では、人口減少地域でのソーシャルワークの創造性について議論を深めたい。

### 開催概要

1. 日 時 2022（令和4）年7月2日（土）、3日（日）
2. 会 場 青森県立保健大学 講堂及び教育研究B棟  
青森県青森市浜館字間瀬58-1
3. 開催方法 会場参加型を予定 ※コロナの状況により変更あり
4. プログラム（予定）

#### 7月2日（土）

##### ○基調講演

「自殺に至る心理的過程と予防的介入—地域における予防モデル構築—」

演者

青森県立保健大学 健康科学部 社会福祉学科 教授 大山 博史 氏

##### ○学会総会

##### ○開催校企画シンポジウム

「人口減少地域におけるソーシャルワークの創造性」

シンポジスト

・青森県鯉ヶ沢町社会福祉協議会 事務局長 井上 雅哉 氏

・社会福祉法人あ〜んど 理事長 大橋 一之 氏

・池田介護研究所 代表 池田 右文 氏

コーディネーター

・同志社大学 社会学部 社会福祉学科 教授 空閑 浩人 氏

7月3日(日)

○学会企画シンポジウム

○自由研究発表

### Ⅲ. 「ソーシャルワーク・コラボセミナー」開催案内

日本ソーシャルワーク学会 & 救急認定ソーシャルワーカー認定機構共同主催  
ソーシャルワーク・コラボセミナー 2021

テーマ：実践者と研究者の対話（クロストーク）で拓く ESW の「実践理論」  
～ 「社会的救命」に資する力量あるソーシャルワーカーを目指して～

同志社大学 野村 裕美

(庶務担当理事 / 研究推進第3委員会、総務委員会)

今年度のセミナーで当学会がコラボするのは、救急認定ソーシャルワーカー認定機構です。救急認定ソーシャルワーカーの実践が、ソーシャルワークの発展にどのように寄与することができるのか、ソーシャルワークの未来を見据えた議論を目指し、企画が実現しました。

認定機構は、救急救命分野の特性に対応し活躍できるソーシャルワーカーを輩出するため、2015年に創設されました。機構は、日本臨床救急医学会、日本保健医療社会福祉学会を構成団体として、日本医療ソーシャルワーカー協会、日本精神保健福祉社会が協力団体として位置付けられ、理事が選出されています。「救急医療現場におけるソーシャルワーク実践に必要な知識及び技術を有するソーシャルワーカーを養成し、統一した基準の下にその認定を行うことで、救急医療の質の向上及び人間の福利（ウェルビーイング）の増進に貢献することを目的とし、現在までに全国に300名ほどの認定者を輩出しています。

救急医療（emergency medicine）の現場には、通常の医療機関受診では対応できないほどの救急の疾患を持つ人や、生命の危機が迫っているなどの緊急性がある人がやってきます。しかし医療ニーズの緊急性や重症度とは関係なく、Life（生命・生活・人生）において耐え難い苦痛がある人々の、さまざまな課題やニーズが顕在化する場でもあります。ソーシャルワーカーにとって救急救命というエピソードは、それまで支援につながっていなかった人々を支援につなげる重要な契機となることはいまでもありません。

救急認定ソーシャルワーカー認定機構の ESW（救急認定ソーシャルワーカー）は、小児虐待、DV、高齢者虐待、飛び込み出産、キーパーソン不在の高齢者、自殺未遂、アディクション、交通事故、高次脳機能障害、認知症、メンタルヘルズ課題、精神疾患の合併、重篤な意識障害、熱傷、外傷、路上生活者、外国人患者、災害、ヤングケアラー等のエピソードから顕在化する人々の困難やニーズをとらえ「社会福祉課題を解決する」（個別支援）という行為と、「社会課題解決に資する救急医療と ESW の実施体制」（体制・制度・仕組みづくり）という使命を果たすことに日夜取り組んでいます。先般発表された診療報酬改定では、新たに「重症患者初期支援充実加算」が設置され、入院時の重症患者に対応する職種として、「入院時重症患者対応メディエーター、ならびに、医師・看護師・薬剤師・社会福祉士・公認心理士またはその他医療有資格者」とされ（下線筆者）、「医療関係団体等が実施する特に重篤な患者及びその家族等に対する支援に係る研修を修了していることが望ましい」と表記されました。ソーシャルワーカーが活躍できる場がひとつまた整ったことを意味します。

本セミナーのキーワードは、「社会的救命」です。この言葉は、大阪医療センターの大西光雄医師による

ものです。大西医師は、日ごろからソーシャルワーカーと連携して臨床に取り組んでおられるそうです。肉体的、精神的、社会的な側面から救命救急医療を提供するにあたり、特に社会的な側面からの救急医療（社会的救命）に資する人材として、多彩な視点を理解する ESW が早期に関与し介入することを訴えています。この度は、「社会的救命とは何か」「そこでソーシャルワーカーに必要とされるものはなにか」について医師の立場の発題から、実践者（ESW、医師）と研究者が対話の場を開き、今、救急医療の現場で顕在化する人々の困難やニーズを見逃さず、「社会的救命」に資するソーシャルワーカーのあり様、そしてその「実践理論」について探求していきます。救急医療初期から人々に介入し、ソーシャルワーク専門職として積極的に関与していくことの意義や果たすべき役割について参加者のみなさんと話し合いたいと思います。

開催日時：2022年3月21日（月）春分の日 13時～17時

実施方法：オンライン開催（要事前申し込み）

プログラム：

○総司会 南本宜子（救急認定ソーシャルワーカー認定機構理事 済生会京都府病院）

#### 【開会挨拶】

小山隆（日本ソーシャルワーク学会会長）

#### 【話題提供】

その1 ESWへ期待すること、医師の立場から

・救急認定ソーシャルワーカー（ESW）が創設された背景

定光大海（救急認定ソーシャルワーカー認定機構代表理事 堺平成病院）

・「社会的救命」に資するソーシャルワーカーへの期待

大西光雄（日本臨床救急医学会 大阪医療センター救急救命センター）

その2 ESWの実践枠組み

野村裕美（救急認定ソーシャルワーカー認定機構理事 / 日本ソーシャルワーク学会 同志社大学）

#### 【クロストーク】

実践報告

その1

篠原純史（救急認定ソーシャルワーカー認定機構副代表理事 高崎総合医療センター）

その2

高橋裕美（救急認定ソーシャルワーカー認定機構理事 大阪大学医学部附属病院）

その3

太田裕子（救急認定ソーシャルワーカー認定機構理事 大阪医療センター）

対論～研究者からのメッセージ～

その1 実践の省察の視点から

浅野貴博（日本ソーシャルワーク学会理事 ルーテル学院大学）

その2 実践の評価の視点から

大島巖（日本ソーシャルワーク学会副会長 東北福祉大学）

#### 【クロストーク～登壇者、フロアのみなさんとともに～】

コーディネーター 野村裕美（同志社大学）

#### 【閉会挨拶】

主催：日本ソーシャルワーク学会、救急認定ソーシャルワーカー認定機構

後援（予定含む）：

日本保健医療社会福祉学会  
日本臨床救急医学会  
日本精神保健福祉士協会  
日本医療ソーシャルワーカー協会  
日本社会福祉士会  
日本ソーシャルワーカー協会  
日本ソーシャルワーク教育学校連盟

参加費：無料

申込方法：Peatix サイトからお申込みください。 <https://swcollabo2021.peatix.com/view>

申込締切：2022年3月14日（月）

連絡事項：

- ・セミナーの資料は事前に配布されます。（後日、本学会ホームページに掲載）
- ・救急認定ソーシャルワーカーの資格更新ポイント対象の研修（10P）となります。

## IV. 「国際研究セミナー」報告

テーマ：国際的な舞台におけるソーシャルアクション  
～ソーシャルワーカーによる国連アドボカシーとSDGs～

ヴィラーグ ヴィクトル  
長崎国際大学 **Virág Viktor**

（学会理事／研究推進第2委員会、国際委員会）

本学会では、2022年1月22日（土）の15時から17時半まで同時通訳付きの国際研究セミナーが開催されました。セミナーのテーマは、「国際的な舞台におけるソーシャルアクション：ソーシャルワーカーによる国連アドボカシーとSDGs」で、日本学術振興会科学研究費基盤研究（B）『多文化共生ケアシステムにおけるグローバルソーシャルワークの理論的・実証的研究』（19H01590）の研究事業との共催企画でした。実施にあたっては、日本ソーシャルワーカー連盟（JFSW）の4団体（日本社会福祉士会、日本精神保健福祉士協会、日本医療ソーシャルワーカー協会、日本ソーシャルワーカー協会）の他に、国際ソーシャルワーカー連盟（IFSW）と国際協力機構（JICA）の後援を頂きました。

国際ソーシャルワーカー連盟（IFSW）と国際ソーシャルワーク学校連盟（IASSW）は、国連の諮問資格を有し、ニューヨーク、ジュネーブ、ウィーン、ナイロビ、バンコクなどの各地の国連事務所において活動しています。これらの国連アドボカシーは、ソーシャルワーカーにとって、国際的な舞台におけるソーシャルアクションの機会となっています。また、近年の持続可能な開発目標（SDGs）は、「グローバルな社会変革をもたらす」と「地球上の誰一人も取り残さない」というソーシャルワークの理念と一致しており、その実現に向けてソーシャルワーカーの活躍に対する期待が高まっています。一方、コロナ禍によって、開発目標の進捗が遅れることが懸念されています。その中、2021年4月に『ソーシャルワークと国連のSDGsに係るIFSWポリシーペーパー』が発行されました。本セミナーでは、国際団体のグローバルな活動に関する基調講演を踏まえて、アジア太平洋地域における国連アドボカシーと、日本からの関連取り組みについての報告を取り上げました。

本学会の黒木保博監事・国際委員長（長野大学教授・同志社大学名誉教授）の開会挨拶を経て、コーディネーターのヴィラグ・ヴィクトル理事（長崎国際大学講師）より上述のような趣旨説明がありました。基調講演は、IFSW 国連諮問委員会のプリスカ・フライシュリン委員長（スイス・㈱WoBe 取締役）に依頼し、IFSW 国連諮問委員会のグローバルな活動とソーシャルワークにとってのSDGsの意義について学びました。SDGsの活用方法に関しては、パートナーシップ・ボトムアップ・可視化の3つのアプローチがキーワードとして浮彫になりました。休憩後、IFSW アジア太平洋地域のセバスティアン・コルドバ国連代表（オーストラリア・ロイヤルメルボルン工科大学講師）は、当地域におけるSDGsの課題と国連のアジア太平洋経済社会委員会（ESCAP）におけるIFSWの活動について整理しました。コロナ禍の下、アジア太平洋地域ではSDGsの深刻な遅れ、項目によっては後退も見られる中、今までと今後の地域レベルの具体的なアドボカシー実践を知ることができました。そして、日本の国内報告を担当した日本ソーシャルワーカー協会国際委員会の高嶺豊委員（沖縄ソーシャルワーカー協会理事長・エンパワーメント沖縄理事長）は、日本

**基調講演 / Keynote Speech**

- IFSW国連諮問委員長 プリスカ・フライシュリン先生
  - スイスでソーシャルワークの学士号と修士号を取得
  - 学位論文のテーマは「開発援助におけるソーシャルワーカーのエンパワーメント」と「国際的・学際的プロジェクトチームにおける結束力」
  - スイスで農機連携のNGOの代表としてソーシャルワーク実践現場で活躍中
- Ms. Priska Fleischlin, IFSW UN Commissioner
  - Earned bachelor and master's degrees in social work in Switzerland
  - Academic theses focused on "Social Workers' Empowerment in Development Aid and Cohesion in Transnational and Transdisciplinary Project Teams"
  - As CEO at a Swiss NGO, engaged in social work practice in the field of care farming






**アジア太平洋地域報告 / Asia Pacific Regional Report**

- IFSW-AP国連代表 セバスティアン・コルドバ先生
  - ロイヤルメルボルン工科大学(RMIT) 講師・ソーシャルワーク学士(BSW)課程 副主任
  - 豪州ソーシャルワーカー協会 上級政策顧問
  - コミュニティ実践、直接実践、教育、研究等において経験
  - 活動において人権、社会・環境正義に焦点
- Dr. Sebastian Cordoba, IFSW Asia Pacific UN Representative
  - Lecturer and BSW Deputy Program Manager, RMIT University
  - Senior Policy Advisor, Australian Association of Social Workers
  - Experience in community work, direct practice, education and research etc.
  - Focus on human rights, social and environmental justice in activities




**日本の国内報告 / Japanese National Report**

- 日本ソーシャルワーカー協会国際委員会 高嶺豊先生
  - 沖縄ソーシャルワーカー協会 理事長
  - NPO法人エンパワメント沖縄 理事長
  - 琉球大学 元教授
  - 国連アジア太平洋経済社会委員会(ESCAP) 元専門官
  - 「アジア太平洋障害者の10年」事務局責任者
- Prof. Yutaka Takamine, International Committee of the Japanese Association of Social Workers
  - President, Okinawa Association of Social Workers
  - President, NPO Empowerment Okinawa
  - Former Professor, University of the Ryukyus
  - Former Specialist, UN Economic and Social Commission for Asia and the Pacific (ESCAP)
  - Secretary, Asian and Pacific Decade of Disabled Persons

**質疑応答・ディスカッション / Q & A and Discussion**

- ご質問はウェブナーのQ&A機能を使ってご入力ください。
- Please enter your questions through the webinar Q&A function.



のソーシャルワーカーの国際的アドボカシーとSDGsについて問題提起を行いました。外国人等差別などの国内の人権侵害を取り上げながら、人権及び社会正義に関するアドボカシーを通じたSDGs活用が示されました。全報告終了後、質問応答及びディスカッションの時間をとり、国内外の一般参加者からの質問を中心に進めました。最後に、共催者代表の立場を兼ねて、本学会の和気純子理事（東京都立大学教授）が総括コメント及び閉会の言葉を述べました。

本企画は、世界中の約350人より事前申込登録を頂き、当日のアクセス者数は約150人で、国内外参加者の割合は約半々でした。記録動画は、本学会のYouTubeチャンネルにて公開しています。また、日英の原文及び翻訳報告資料は本学会ホームページに掲載中です。

## V. 役員選挙結果

2022年3月1日	
会員 各位	日本ソーシャルワーク学会理事会
役員選挙の結果について	
謹啓 時下ますますご清祥の段、お喜び申し上げます。日頃は学会の発展および運営にご協力とご尽力をいただき、感謝申し上げます。	
さて、本学会の2021年度役員選挙が工藤英明選挙管理委員長（青森県立保健大学）のもと行われました。2021年12月21日18時から、会則及び役員選出規程に基づき開票が行われ、2022年1月9日開催の2021年度第4回理事会において選挙結果の報告および推薦理事の選出が行われました。つきましては、会員の皆様にその結果をご報告いたします。	
謹白	
記	
理事・監事の当選人は以下のとおりです。	
当選人 理事（五十音順）	
1. 池田 雅子	
2. 大島 巖	
3. 大谷 京子	
4. 小山 隆	
5. 志水 幸	
6. 和気 純子	
当選人 推薦理事（五十音順）	
1. 川島ゆり子	
2. 木村 容子	
3. 横山登志子	
当選人 監事	
1. 黒木 保博	
以上	

## VI. 2021 年度第 3 回理事会議事録

### 日本ソーシャルワーク学会 2021 年度第 3 回理事会議事録

<日時> 2021 年 11 月 14 日（日）18 時～20 時 Zoom によるオンライン会議

<出欠状況>

役職	氏名	所属	出欠
会長	小山 隆	同志社大学	出
副会長	久保 美紀	明治学院大学	委任状
	志水 幸	北海道医療大学	出
	大島 巖	東北福祉大学	出
	空閑 浩人	同志社大学	出
理事	池田 雅子	北星学園大学	出
	大谷 京子	日本福祉大学	出
	木村 容子	日本社会事業大学	出
	横山登志子	札幌学院大学	出
	和気 純子	東京都立大学	出
	浅野 貴博	ルーテル学院大学	出
	荒井 浩道	駒澤大学	出
	岡田 まり	立命館大学	欠
	佐藤 俊一	NPO 法人スピリチュアルケア研究会ちば	出
	白川 充	仙台白百合女子大学	委任状
	杉野 聖子	江戸川学園おおたかの森専門学校	出
	保正 友子	日本福祉大学	出
ヴァイラーグヴィクトル	長崎国際大学	出	
監事	黒木 保博	長野大学	出
	岡本 民夫	同志社大学名誉教授	欠
庶務	野村 裕美	同志社大学	出

<協議事項>

1. 各委員会より活動報告
2. 会員の動向（前回理事会（7月10日）以降）
3. 次回の理事会日程について
4. その他

#### 1. 各委員会より活動報告

##### ○研究推進第一委員会

1. 学会誌編集委員会 学会誌 43 号編集進捗状況について報告があった。
2. 学会賞選考委員会 2022 年度の選考にむけての報告があった。
3. 研究奨励委員会 前回の理事会で採択が決定された 1 件の申請について、承認された助成額に基づき、経費の使用内訳書の再提出を依頼し、手続きを進めている旨報告があった。

##### ○研究推進第二委員会

1. 2022 年度第 39 回大会（青森大会）の準備状況について、以下の通り報告があった。  
 期日：2022 年 7 月 2 日（土）～3 日（日）  
 会場：青森県立保健大学（青森県青森市浜館字間瀬 58-1）  
 開催形式：対面、またはオンライン、あるいはハイブリット  
 参加費（予定）：会員 5,000 円、非会員 8,000 円、



県内実践者 3,000 円、学生・大学院生 1,000 円

テーマ：「人口減少地域におけるソーシャルワークの創造性」（仮）

内容：○特別講演「過疎地域における自殺予防」

○開催校企画シンポジウム「人口減少地域におけるソーシャルワークの創造性」

○学会年次総会

（\* 2 日目）○学会企画シンポジウム

○自由研究発表

\* 今後のスケジュール：4 月エントリー開始、5 月中旬締め切り、6 月抄録原稿締切

\* 2022 年 3 月に案内ちらしを郵送する等広報を開始する予定。

なお、全面オンラインになった場合は、会費等も再検討する。

総会は、一日目の最後に設定し、懇親会は設けない。

## 2. 学会セミナーの開催について、以下の通り報告があった。

- ・国際研究セミナー「国際的な舞台におけるソーシャルアクションーソーシャルワーカーによる国連ア  
ドボカシーと SDGs -」

日時：2022 年 1 月 22 日（土）15 時～ Zoom ウェビナー

\* 現在 185 名の参加申し込みあり。（実践者 42%、研究者・教育者等 25%など。日本は 46%、  
半分以上は海外。残りはアメリカ、ヨーロッパ、アフリカなど）当日は同時通訳がつく。

## 3. 共同研究の取り組み状況について、以下の通り報告があった。

テーマ「母子生活支援施設におけるソーシャルワーク実践の枠組みとその構築のための検討課題」

○仙台ワーキング

- ・現在、過去の 14 事例を分析・検討している。
- ・1 あるいは 2 月にシンポジウムを開催予定、3 月に報告書発行したい。
- ・次回第 39 回大会で成果報告（自由研究発表 1～2 本）を予定している。

○京都ワーキング

- ・第 3 回研究会 7 月 8 日（水）10:00～11:00 に開催（13 名参加）
- ・第 4 回研究会 11 月 12 日（金）10:00～11:00 に開催（14 名参加）
- ・京都市母子生活支援施設合同研修会 12 月 1 日 13:00～16:30 予定

\* コロナの関係により、仙台と京都に分かれて研究会をしている。仙台ワーキングは事例分析をしてい  
る。京都は 4 施設が集まり、研究会をしている。12 月の福祉行政職との研修会に参加予定。来年度  
には成果をまとめる予定。

○研究推進第三委員会

### 1. 出版・教材開発班

実践研究支援ワークショップ開催案について、提案があり了承された。

### 2. 社会貢献推進班

2021 年度「ソーシャルワーク・コラボ」の企画についての提案があり、了承された。

○国際委員会

研究推進第二委員会との共同企画である国際研究セミナー「国際的な舞台におけるソーシャルアクショ

ン・ソーシャルワーカーによる国連アドボカシーとSDGs -」についての報告があった。

#### ○総務委員会

以下の通り、報告があった。

- ①会員拡大等のための学会広報動画作成について（7月21日公開）
- ②メールマガジン（2021年8月（94）号～11月（97）号発行済、毎月発行予定）
- ③ニュースレター（第131号：2021年10月1日発行済、第132号は2022年3月発行予定）
- ④学会役員選挙の実施について
  - 1) 選挙管理委員（7月17日総会報告済）工藤英明会員、狩野晴子会員、口村淳会員
  - 2) 第1回選挙管理委員会
    - ・2021年10月2日（土）17:00～18:00 開催済 →工藤会員に委員長を依頼した。
    - ・スケジュール確認、公示&投票実施要領文書、インターネット投票システムの確認等
  - 3) 今後の予定
    - ・11月中 選挙人・被選挙人名簿確定&投票システム設定等確認
    - ・11月末 会員名簿、公示文書、投票実施要領、投票システム用圧着はがきの発送
    - ・2021年12月1日：公示
    - ・2021年12月6日（0時）から12月20日（24時）：投票
    - ・2021年12月21日：第2回選挙管理委員会の開催（予定）・開票
    - ・2022年1月：理事会で報告・当選理事確認および理事会推薦理事の協議

#### 2. 会員の動向（前回理事会2021年7月10日以降～11月9日現在）

以下の通り、8名の新入会員、および8名の退会が承認された。

##### \*入会（8名）

- 準会員 宇津木三徳（立命館大学大学院） 鈴木美乃里（株式会社LITALICOパートナーズ）
- 正会員 岡田正彦（栃木県立岡本台病院） 清水正美（城西国際大学）  
飯村史恵（立教大学） 小松豊明（シャプラニール市民による海外協力の会）  
岩田貞昭（社会福祉法人南山城学園） 大塚明子（浅草寺福祉会館）

##### \*退会（8名）

小嶋章吾 益川順子 塩野敬祐 都村尚子 伊藤一三 牧里每治 佐藤克繁 石田博嗣

#### 3. 次回理事会（2022年度第4回理事会）日程について

次回理事会（および正副会長会議）日程について、以下の通りとなった。

- ・2022年1月9日（日）午後（14時～16時頃）もしくは夕方（17時～19時頃）の時間帯で開催予定（正副会長会議は、1月8日（土）17時～で開催予定）

#### 4. その他

- ・2021年10月衆院選におけるソーシャルケアサービス研究協議会構成団体による特定候補者の推薦行為について（本学会に対する質問への回答について）報告があった。

## Ⅶ. 2021 年度第 4 回理事会議事録

### 日本ソーシャルワーク学会 2021 年度第 4 回理事会議事録

<日時> 2022 年 1 月 9 日（日）17 時～19 時 Zoom によるオンライン会議

<出欠状況>

役職	氏名	所属	出欠
会長	小山 隆	同志社大学	出
副会長	久保 美紀	明治学院大学	出
	志水 幸	北海道医療大学	出
	大島 巖	東北福祉大学	出
	空閑 浩人	同志社大学	出
理事	池田 雅子	北星学園大学	出
	大谷 京子	日本福祉大学	出
	木村 容子	日本社会事業大学	出
	横山登志子	札幌学院大学	出
	和気 純子	東京都立大学	出
	浅野 貴博	ルーテル学院大学	出
	荒井 浩道	駒澤大学	出
	岡田 まり	立命館大学	委任状
	佐藤 俊一	NPO 法人スピリチュアルケア研究会ちば	出
	白川 充	仙台白百合女子大学	出
	杉野 聖子	江戸川学園おおたかの森専門学校	出
	保正 友子	日本福祉大学	出
ヴァイラーグヴィクトル	長崎国際大学	出	
監事	黒木 保博	長野大学	出
	岡本 民夫	同志社大学名誉教授	欠
庶務	野村 裕美	同志社大学	出

<協議事項>

1. 役員選挙の結果について
2. 各委員会より活動報告・活動予定等
3. 会員の動向（前回第 3 回理事会（11 月 14 日）以降）
4. 次回の理事会日程について
5. その他

#### 1. 役員選挙の結果について

役員選挙の結果について、選挙管理委員会からの報告があった。投票率は 13.3 パーセントであったこと等が報告された。当選理事・監事の内諾状況の確認および推薦理事の選出について協議を行った。推薦理事候補者には、順次就任依頼を行うこととなった。3 月中下旬に開催する新理事を迎えた理事会等で各種担当、委員会等について協議する予定。

#### 2. 各委員会より活動報告・活動予定等

##### ○研究推進第一委員会

##### 1. 学会誌編集委員会

- ・学会誌 43 号について、近日中に発刊予定である旨報告があった。
- ・学会誌 44 号について、2021 年 12 月末投稿締切で、投稿原稿 10 本（論文：8 本、資料解題：2 本）

と多数の投稿があった。査読委員のお願いについて：理事の先生方は全員、査読委員に加わっていただきたいと依頼があった。計量分析、コミュニティソーシャルワーク、多文化ソーシャルワークの領域の投稿論文が増加しているので、これらの領域の査読委員を増やす必要がある旨共有された。

## 2. 学会賞選考委員会

対象文献リスト作成中であり、会員からの推薦（締切：2022年1月末日）を含めて選考作業に入る予定である旨報告があった。

## 3. 研究奨励委員会

会員研究奨励費の募集をMM、HPなどで行う。締切は例年通り2022年5月末日とする旨報告があった。

## ○研究推進第二委員会

### 1. 2022年度第39回大会（青森大会）の準備状況について、下記の通り報告があった。

期日：2022年7月2日（土）～3日（日）

会場：青森県立保健大学（青森県青森市浜館字間瀬 58-1）

実行委員会：児玉寛子（委員長・青森県立保健大学教授）、工藤英明（事務局長・同大准教授）、宮本雅央（委員・同大講師）、田中志子（委員・青森大学教授）

開催形式：対面開催の予定ではあるが、感染の状況に応じて検討する

参加費：会員 5,000 円、非会員 8,000 円、県内実践者 3,000 円、学生・大学院生 1,000 円

テーマ：「人口減少地域におけるソーシャルワークの創造性」（仮）

内容：○特別講演「過疎地域における自殺予防」大山博史

○開催校企画シンポジウム「人口減少地域におけるソーシャルワークの創造性」

シンポジスト1 井上雅哉（鯉ヶ沢町社会福祉協議会 事務局長）

シンポジスト2 大島一之（社会福祉法人あーると 理事長）

シンポジスト3 池田右文（池田介護研究所 代表）

座 長 空閑浩人（同志社大学 教授・学会副会長）

○学会年次総会

(\*2日目) ○学会企画シンポジウム 検討中

・自由研究発表（4月エントリー開始、5月中旬締め切り、6月抄録原稿締切）

### 2. 学会セミナーについて、以下の通り報告があった。

・国際研究セミナー「国際的な舞台におけるソーシャルアクション－ソーシャルワーカーによる国連アドボカシーとSDGs－」

日時：2022年1月22日（土）15時～ Zoom ウェビナー

担当理事より本日時点で300名の申し込みがあること、理事を中心に広報を引き続き協力をお願いしたい旨、報告および依頼があった。

### 3. 共同研究（テーマ「母子生活支援施設におけるソーシャルワーク実践の枠組みとその構築のための検討課題」）について報告があった。研究成果は年次大会での報告等を検討している。

## ○研究推進第三委員会

### 1. 出版・教材開発班

・「実践研究支援ワークショップ」を次の日程で開催する旨報告があった。

1日目：2022年2月13日（日）13:00-17:00

2日目：2022年3月6日（日）13:00-17:00

## 2. 社会貢献推進班

・2021年度ソーシャルワーク・コラボセミナーについて、以下の通り開催する旨報告があった。

コラボ先：救急認定ソーシャルワーカー認定機構と共催で実施。

開催予定日：2022年3月21日（月・祝）

全国規模の団体と連携するコラボは初の試みとなるため、広報に力を入れて進めていきたいこと、今後日本ソーシャルワーク教育学校連盟、社会福祉学会連合等にも後援依頼していきたい。

・2022年度ソーシャルワーク・コラボセミナーについては、2022年度第39回大会（青森大会）と関連づけて、青森県社会福祉士会とのコラボ予定である旨報告があった。

## ○国際委員会

国際研究セミナー「国際的な舞台におけるソーシャルアクションーソーシャルワーカーによる国連アドボカシーとSDGsー」に関する報告があった。

## ○総務委員会

メールマガジン（2021年12月（98）号～2022年1月（99）号発行済）、およびニュースレター（第132号は2022年3月発行予定）に関する報告があった。

また、学術論文データベース（EBSCOhost:「エブスコホスト」）への本学会誌掲載論文の収録について担当理事より提案があり承認された。以降手続きを進めることとなった。

## 3. 会員の動向（前回理事会2021年11月14日以降～2022年1月7日現在）

以下の通り、3名の新入会員、および2名の退会が承認された。

### \*入会（3名）

○正会員 金田寿代（浅草寺福祉会館）

佐藤千草（仙台市宮城野区役所保護課）

菊池留美（同志社大学大学院社会学研究科社会福祉学専攻）

### \*退会（2名）

山内留美 林祐介

## 4. 次回理事会（2021年度第5回理事会）日程について

次回理事会日程について、3月中下旬で開催することとなった。日程はあらためて調整する。

## 5. その他

志水副会長（研究推進第2委員会委員長）より、次々大会が40周年となるため、記念行事等の検討について発言があった。

## Ⅷ. 会員の声（2021年度新入会員）

### 精神障害を抱える当事者とソーシャルワーカーの関係性を探求して

神奈川県立保健福祉大学 井上 夏子

私は、精神保健福祉領域のソーシャルワーカーとして、主に医療機関における実践に従事してきました。日々の実践の中、精神障害を抱える当事者の方たちとの出会いは、私の専門職としてのアイデンティティに多くの学びを与えてくれました。私が研究領域へ踏み出そうとした時、その背中を押してくれたのは、当事者の方たちと専門職の仲間たちでした。私にかけてくれた想いは、立場に依拠するものではない、「人と人」としてのかかわりの形であったように思います。

私の研究は、精神保健福祉領域の当事者の方たち、実践に取り組むソーシャルワーカーの方たちの「声」から学ぶことだと考えています。自分だけでは辿り着けないような道のりも、多くの協力者と歩むことで大きな成果につながることができます。この度、ソーシャルワーク学会への入会の機会を得たことで、その想いを新たに、誠実に、現場の実践と研究をつなぐ役割の一端を担っていきたいと思っています。

### 入会のご挨拶

東北大学大学院教育学研究科／日本学術振興会特別研究員 二本松 直人

本年度より、入会させていただきました東北大学大学院教育学研究科／日本学術振興会特別研究員の二本松直人と申します。現在は、臨床心理士／公認心理師の資格を持ちながら、「生活保護ケースワーカーのメンタルヘルス」に関する研究を3年ほど行っています。これまで、いじめ予防のコミュニケーションや、ユーモア、原発避難者など様々な研究も実施・参加させていただきました。実践の場としては、専門を家族療法として、虐待支援センター、就労支援事業所、生活困窮者支援、NPO カウンセリングオフィス室長補佐などを経験しております。研究、実践ともに福祉領域と産業領域が主活動となっています。しかしながら、ソーシャルワーカーとしての実践はなく、福祉系の資格も持っていませんでした。

家族療法の考え方や手法にもとづき、福祉領域におけるコミュニケーション支援や戦略を研究することで、福祉領域に貢献できればと考えております。また、福祉領域について、まだまだ不勉強であるために研鑽を積んでいきたいと思っています。どうぞよろしくご厚意申し上げます。

### ソーシャルワーカーで在り続けるために

医療法人おもと会大浜第一病院 嘉手納 泉也

「社会と己の真を問う」ため、この度、入会させて頂きました嘉手納泉也と申します。私は、実践15年目の急性期病院のソーシャルワーカーです。医療政策や社会構造の変遷により、在院日数短縮や退院支援への業務傾斜など多忙な中でも、目の前のその方の「今、これから」を支援するため切磋琢磨してきました。そのつもりでしたが、2020年のコロナ禍で当たり前のように行っていた実践を、研究の視点で見つめ直したいと考えるようになり、夜間は沖縄国際大学大学院修士課程で「問い」を続けています。

現在の関心は、「原点回帰」と「専門職アイデンティティ」と「多様性のある支援過程」です。実践と研究の架け橋として邁進したく、今後ともご指導のほどよろしくご厚意いたします。

## 入会にあたってのご挨拶

早稲田大学大学院／日本学術振興会／神奈川県教育委員会 藤本 啓寛

この度、日本ソーシャルワーク学会に入会させていただきました藤本啓寛と申します。私は小・中・高校時代における学校経験をきっかけに早稲田大学教育学部に入学しました。そこでスクールソーシャルワーカー（SSWr）の存在を知り、大学院修士課程への進学と並行して日本社会事業大学の通信課程に入学し、修了と共に社会福祉士を取得しました。その後博士後期課程で研究を続けながら、神奈川県立高等学校にてSSWrとして勤務して3年目となります。

私は前述のSSWrについて、社会学的な研究を行っています。具体的には、政策、職域、労働・任用条件といったマクロレベルのデータの収集・分析と、現場におけるミクロレベルの実践への質的調査に基づく分析の双方から実証的に明らかにしています。

今後、ソーシャルワークを研究する先生方とつながり、学びながら、研究を進めていきたいと考えております。どうぞよろしくお願いたします。

## 入会にあたりまして

東北公益文科大学 佐藤 昭洋

東北公益文科大学の佐藤昭洋と申します。本学は、私の出身地でもある山形県酒田市にごぞいます。現任校では、社会福祉士養成課程のなかで社会福祉実習支援室担当として実習事務や国家試験対策などの業務を担当しております。

現在の研究分野は、社会福祉の歴史研究のなかでも人物史、施設史、地域史などに関心があります。特に、近代日本における育児事業や育児施設経営に従事した、五十嵐喜廣という人物とその施設の経営方法や子どもたちへの支援のあり方を明らかにしたいと思ひ、研究を遂行しております。現代の社会的課題について歴史という角度から検討し、福祉現場での実践にも寄与できるような歴史研究のあり方を目指しております。

また最近、ソーシャルワーク実習教育を陰で支えている事務やマネジメントの重要性などにも関心があり、学んでまいりたいと思っております。まだまだ若輩者ではございませうが、これからどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

## 日本ソーシャルワーク学会への入会にあたっての思ひ

早稲田大学大学院 陶 嘉禱

私は学部時代に母子生活支援施設での社会福祉士現場実習をきっかけに、DVについて研究の関心を持ち始め、修士課程以降は若者の親密性における暴力、いわゆるデートDVをテーマに研究しています。修士課程では、配偶者暴力相談支援センターにおけるデートDVの防止と支援を取り上げました。今は若者当事者の視点に基づくデートDVへの支援アプローチを博士論文の研究テーマとしています。

DV・デートDVの発生には社会的・文化的背景と要因に大きく関わっています。また依存症、共依存など精神保健福祉分野の課題も関連しています。これらを問題意識としてもち、ソーシャルワークの視点からどう取り組んでいけばよいのかを考えていきたいです。

社会福祉士の資格を取得しており、これまでは3年ほどという短い期間であるものの、障害分野の現場に携わっていました。今後はより多くのソーシャルワーク分野で活躍されている方々に出会い、互いの研究や実践を学び合うことを通し、ソーシャルワーク実践に還元できる研究をしていきたいと思ひています。

## 入会にあたってのご挨拶

特定非営利活動法人みたけ弥勒クラブ 立石 真司

この度、入会させていただきました立石真司と申します。私は、これまで障害者福祉分野で約20年間、入所施設及び通所事業所の生活支援員や相談支援専門員として障がいのある方の支援に携わり実践経験を積んできました。その現場実践の中から日々様々な難しさに直面する中で、実践と理論の融合を図り現場に還元できるような研究を行いたいと思い、岩手県立大学大学院社会福祉研究科博士前期課程を修了しました。令和4年4月からは同大学院博士後期課程で研究を継続する予定です。

主な研究テーマは、障害者の意思決定支援のあり方の検討です。今後は障害者の地域移行支援における意思決定支援のあり方に焦点をあてて、相談支援従事者たちの実践に役立つような実践モデルを構築していきたいと考えています。

私自身は研究者としてはまだ未熟ですが、実践経験を活かし、現場に根付いた研究を続けていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

## 新規入会にあたって自己紹介

堺第3地域包括支援センター 淡路 和孝

この度、新規入会させていただきました。普段は地域包括支援センターで勤務しており、個人・自組織・地域に対するソーシャルワークを実践しております。昨今、高齢者だけでなくその家族に課題を抱えている人も急増しており、高齢者に対する支援を入口に、地域で孤立している世帯に対するソーシャルワークについて関心を持っております。さらに、新型コロナウイルス感染症が長期化するなかで、孤立や生活が困窮している人が多くなってきています。このようななかで、ソーシャルワーカーとしてどう向き合っていくべきか、日々悩みながら実践しております。

今まで実践してきた経験を活かしながら、学会活動を通じてソーシャルワークの専門性の向上に少しでも貢献できればと考えております。今後ともご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

## 60の手習い

栃木県立岡本台病院 岡田 正彦

還暦間近ですが、60の手習いで、これからも精進していく所存です。

研究・実践の紹介：「精神保健福祉の視点から観たソーシャルインクルージョン」をメインテーマとして掲げ、「精神障害者を排除しない、セルフヘルプグループのあるまちづくり」を実践的に展開していきたいと思っております。今後、御指導御鞭撻の程、何卒、宜敷くお願い申し上げます。

入会にあたっての思い等：精神衛生法の時代に精神科病院に就職し、35年が過ぎようとしております。現場主義の実践家です。四半世紀、アルコール関連問題ソーシャルワークに従事して参りました。無資格で就職し、在職中に、認定カウンセラー（日本カウンセリング学会）、精神保健福祉士、公認心理師の各種資格を取得させていただきました。これからも、臨床現場に、しっかりと根を張って、精一杯且つ一生懸命、支援を展開していく所存です。



## 社会福祉法人の本来的機能と役割を問う

社会福祉法人南山城学園 岩田 貞昭

はじめまして、京都府に所在します社会福祉法人南山城学園の岩田貞昭です。第36回『日本ソーシャルワーク学会大会』において、シンポジウムへの登壇の機会を得たことから、研究に興味を持ち、現在、修士課程2年で3月に修了予定です。

シンポジウムでは、社会福祉法人の課題として、福祉サービスによる実践のみならず地域課題へ積極的な実践を提起し、ソーシャルワークを研究者との連携の必要性を提案しました。そして、修士論文では「地域共生社会実現に向けた社会福祉法人の本来的役割・機能について研究」をテーマに、職員教育の視点から考察を行っています。社会福祉の本質を理解する教育を基底としたソーシャルワークによる実践が、社会福祉法人の本来的役割・機能を果たすことにつながるのではないかと。諸先生方にご指導をいただきながら、研究を進めていきたいと考えております。

## 入会にあたってのご挨拶

浅草寺福祉会館 大塚 明子

この度、入会させていただきました大塚明子と申します。私が務めております「浅草寺福祉会館」は、東京都の浅草（あさくさ）にある宗教法人浅草寺（せんそうじ）が運営する民間の福祉施設で、相談事業、ネットワーク・啓発事業、憩いの場事業を3つの柱として活動しています。

現在の主な研究としては、当会館が開設から60年以上に渡り継続してきた相談活動を整理し相談記録を再精査した上で、テキスト型データを用いた分析を行っています。研究を進めていくにあたり、先行研究や様々な諸先生方の著書に触れれば触れるほど、自身の知識不足や、物事に対する視点の至らなさを痛感する日々ですが、本学会で学ばせていただきながら、少しでもソーシャルワークへの取り組みを進めていければ幸いです。ご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い致します。

## IX. 自著紹介

大塚美和子・西野緑・峯本耕治編『「チーム学校」を実現するスクールソーシャルワーク—理論と実践をつなぐメゾ・アプローチの展開』（明石書店出版、2020年）

神戸学院大学 大塚美和子

本書は、2008年から2020年までの12年間にわたり開催してきたスクールソーシャルワーク事例研究会の発表事例や講演内容を中心に編集したものです。事例研究会では、スクールソーシャルワークの専門性を確立するために、アセスメント力をつけることに焦点を当て、実践の根拠となるソーシャルワークの理論を学び直し、事例の理解を深める演習を繰り返し行ってきました。こうした経緯を踏まえ企画した本書には、以下のような三つの特徴があります。

●メゾ・アプローチを柱に「チーム学校」を実現する

メゾ・アプローチは、学校組織を対象に行うケース会議やコアチーム会議を指し、マイクロ・アプローチだけでは実現しえないチーム支援体制の構築を可能にします。つまり、メゾ・アプローチは、「チーム学校」を作り出すための具体的なアクションであり、スクールソーシャルワーカーが一人でマイクロ・アプローチを行

うよりも学校がより変化し、子どもの最善の利益につながります。

●実践と理論・法制度を双方向に行き来しながら事例の理解を深める

理論や法制度に基づく実践の重要性はよく指摘される点ですが、スクールソーシャルワーカーの多くが教育現場のニーズへの対応で日々精一杯なのが現状ではないでしょうか。そこで、本書では、理論や法制度から事例を読み解き、また逆に、事例を分析する中で理論や法制度の意義や活用に気づけるように、実践事例とその実践の根拠となる理論と法制度をセットにして紹介しています。

●困難事例に対して当事者を含めたチーム・アプローチを展開する

本書で紹介したいじめ、不登校、発達障害、虐待、学級崩壊などの事例は、いずれも教育現場が日常的に支援に悩み対応に苦慮している困難事例です。そのような事例に対しても、関係者がチームとなって子どもや保護者のリソースや強みを活かした支援を展開すれば、子どもの問題が改善することを本書の各事例から読み取ることができます。特に、保護者とのケース会議や子どもとのケース会議等の当事者を含めたチーム・アプローチの実践を数多く紹介しており、いわゆる従来の「ケース会議」とは異なる支援方法についても紹介しています。

今後は、本書を活用した実践講座を計画し、学習を継続する予定です。大学のスクールソーシャルワーカー養成や現任訓練においても本書を活用していただけると幸いです。

川島典子著『ソーシャル・キャピタルに着目した包括的支援—結合型 SC の「町内会自治会」と橋渡し型 SC の「NPO」による介護予防と子育て支援—』（晃洋書房、2020年）

福知山公立大学 川島 典子

本書は、筆者の博士学位論文を単著化したものである。

筆者は、学部時代を同志社大学の社会福祉学科で過ごし、ケースワークの権威だった大塚達雄先生に師事した。だが、ソーシャルワーカーにはなり損ねて、新聞記者になってしまった。1986年、男女雇用機会均等法施行元年のことである。ひどい女性差別にあい退職。郷里の松江で結婚し出産を経て、2001年に母校の社会福祉学科の修士課程に入学した。主任教授は、本学会の創始者である岡本民夫先生である。岡本先生は、我々弟子たちにある課題を与えられた。

本書には、筆者なりのその課題への回答が示してある。課題とは何か？それは、社会福祉学の独自性を示し、ソーシャルワークを含む社会福祉学を科学する「触媒」を開発せよという使命だった。

2007年に大学教員になった筆者は、その後、介護離職する。博士後期課程には進学していたものの博士の学位がなかったため、なかなか復職できず、今度は2017年に同志社の総合政策科学研究科の博士後期課程に入り直した。それゆえ、本書は、ソーシャルワークというよりむしろ政策提言の視座から書かれている。社会福祉学では、ソーシャルワークと政策は真逆のベクトルだと思われがちだが、筆者は、そうは思わない。また、高齢者福祉や児童福祉などの各論に分けて論じられがちでもある。だが、それも現実にはそぐわない。

まさに、それらの課題を現場で克服すべく、2017年に始まったのが包括的支援である。本書では、この包括的支援の問題を論じ、その課題を克服するためには、現状ではソーシャル・キャピタル（以下SC）に依拠せざるを得ないことを前提として論を展開している。

具体的には、包括的支援における介護予防と子育て支援を結合型SCの町内会自治会と橋渡し型SCのNPOの双方を専門職がつなぎながら行政や地域のボランティアと協働して行えば効果的なのではないか？という仮説を調査対象約2000の量的調査を相関分析などによって分析した結果と、先進事例の事例研究の

結果によりまとめた。

まず、第1章では介護予防と子育て支援の概念と政策的経緯を俯瞰し、第2章ではSCとSCの下位概念を整理した。第3章、第4章では本論の仮説を検証する調査結果を量的・質的調査の双方から分析している。第5章では、NPOの活動が盛んなフィンランドの事例から日本の福祉政策への示唆を行い、第6章で結論を述べた。

岡本先生の提示された「触媒」への回答とは、果たして何であったのか？本書を手にとり、考えて頂ければ幸いである。

## 木下大生著『認知症の知的障害者への支援：「獲得」から「生活の質の維持・向上」へ』（ミネルヴァ書房、2020年）

武蔵野大学 木下 大生

本書の目的：近年、日本では障害者支援施設（以下、施設）に入所する知的障害者の高齢化が進んでおり、高齢化が課題になっていると回答している施設が8割に上る。海外の先行研究から、知的障害者は一般の人に比べて認知症により早期に高い割合で罹患すること、しかし、その支援方法が確立していないことが明らかにされている。そこで本研究では、1) 施設に入所する知的障害と認知症症状がある人を疫学的状況、2) 知的障害と認知症症状がある人の状態像、3) 施設での直接支援の実際と課題、4) 制度的な課題、の4点を明らかにし、施設に入所する知的障害と認知症症状がある人の支援について検討することを目的とした。

総合考察：調査では以下の3点を明らかにした。

第1は施設に入所する知的障害者の高齢化、及び認知症症状がある人の割合は高まってきており、支援に課題が生じている。

第2は、直接支援における課題は、これまで「指導・訓練」の観点からの支援観・支援方針を「生活の質の維持・向上」へと転換することが困難であること。

第3は、4点の制度的課題である。1つは医療確保が困難であること。2つは、介護保険と障害者支援制度の兼ね合いの問題で、障害者支援制度と介護保険制度の整合性をどのように図っていくかが改めて問われていること。3つは、施設で認知症特性がある知的障害者を支援しようとした際に、支援人員が不足する課題である。これは施設が、知的障害者のライフステージを想定されていないことに課題があると考えられること。4つは、認知症症状がある知的障害者の適切な居住の場がどこであるかが明確になっていない問題である。

以上の結果を踏まえ、施設の支援員はソーシャルワーカーという立場から、1) 認知症症状がある知的障害者が増加していることへの理解とその事実についての普及・啓発、2) 支援方針の転換の必要性を認識、3) 社会資源の開発と連携、4) 制度の改正・構築を行うために社会に働きかけていくこと、の4点が求められることを提言した。

## 村社卓著『たのしくつながる高齢者の孤立予防モデルー参加とサービス利用を促す関係づくり』（川島書店、2020年）

岡山県立大学 村社 卓

著者は、2013年から約6年の間、高齢者の孤立予防について大都市を中心に調査を行いました。本書はその成果をまとめたものです。

本書が出版された2020年の冬も、今日と同様、特に大都市では、参与観察も対面でのインタビューも、

実施が困難でした。新型コロナウイルスの世界的な蔓延のなかで、対面的な調査を前提とする定性的（質的）研究は今後どうなるのだろうか？本書はそのような不安のなかでまとめられました。

著書名は「たのしくつながる高齢者の孤立予防モデル」です。副題は「参加とサービス利用を促す関係づくり」です。なぜこのタイトルなのか？それは、たのしいこととつながりとは、高齢者の孤立予防を実現する推進力だからです。高齢者の孤立予防活動を行ううえで、たのしくないと、対象者だけでなくボランティアも参加してくれません。参加しても継続は困難です。そして、必要に応じて福祉サービスの利用につないでもらえるシステムは、多くの人にとって魅力的です。本書では、このことを大都市における高齢者の孤立予防を目的としたコミュニティカフェの実践分析を通してモデル化しました。

高齢者がたのしくつながるには、参加とサービス利用を促す関係づくりが前提となります。関係づくりには、「支援者」だけでなく媒介機能を担う「媒介者」とその「協力者」が必要です。このコミュニティカフェの活動には、ボランティアなど多くの地域住民が、主に「協力者」として参加しているのです。

本書は、著者にとって、ソーシャルワーク研究における原点回帰となるものでした。なぜなら、上記のように「媒介者」および第三者としての「協力者」の役割に注目しているからです。このように、本書は「介護予防・日常生活支援」の展開が期待されるこんにち、ソーシャルワーク実践において、改めて「媒介者」および「協力者」への注目とその積極的な活用を提案するものです。

加えて、本書では定性的（質的）データ分析の手順についても、実例を用いて具体的に説明しています。これまで、定性的研究の領域において、コーディングの方法を具体的に提示した書籍はほとんどありませんでした。そして、このコーディング作業を、著者自らの経験を通して記述しているところに本書の特徴があります。ぜひ本書を、定性的コーディングのガイドラインとしても活用してください。

## 編 集 後 記

日本ソーシャルワーク学会通信（ニュースレター）No.132をお届けします。本号は、巻頭言「『構造を変革する』ための『大きな行動 Action』『小さな行動 action』」、「第39回大会」開催案内、「ソーシャルワーク・コラボセミナー」開催案内、「国際研究セミナー」報告、役員選挙結果、2021年度第3回理事会議事録、2021年度第4回理事会議事録、会員の声（11件）、自著紹介（4件）と盛りだくさんの内容です。

さて、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の拡大がなかなか収まりません。あれから約2年が経過しました。“with コロナ”の時代において改めて気付かされるのは、紙媒体で発行されるニュースレターの意義です。対面でのリアルな交流が制限されるなか、紙媒体のニュースレターは、実際に頁をめくりながら学会の情報を得る貴重な機会となっているように思います。

ご承知のとおり本学会は、メールマガジンが毎月発行されより新しい情報を知ることができます。今後もニュースレターとメールマガジンが連携することで、有益な情報を会員の皆様にお届けしていきたいと思えます。より充実した紙面にするためにも、ご意見、情報などを学会にお寄せいただければ幸いです。

駒澤大学 荒井 浩道

（学会理事／研究推進第2委員会、総務委員会）

### 【日本ソーシャルワーク学会事務局】

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂4-1-1 オザワビル 2F（株）ワールドプランニング内

TEL：03-5206-7431 FAX：03-5206-7757

E-mail：jsssw@zfhv.ftbb.net <http://www.jsssw.org>